

白方の風

【学校教育目標】自ら学び考え、心豊かで
健やかに生きる児童の育成

令和7年度
No.38
東海村立白方
小学校
2026.1.30
児童数452人

今週の29日（木）には、令和8年4月に小学校への入学を迎える新入生の保護者の皆様への説明会が行われました。次年度の新入生は現在のところ75名となっております。既に兄弟、姉妹が白方小におられるご家庭の方、及び初めて白方小にお子様が入学されるご家庭の方が共に、安心して無事に4月のご入学を迎えられるように準備を進めて参ります。

もうすぐ節分

～ 多くの「福」がもたらせられることを。～

節分とは文字の通り「季節を分ける」ことを意味し、本来は立春・立夏・立秋・立冬の前日を指す言葉でした。中でも、2月3日前後の立春は1年の始まりとして特に大切にされていたことから、立春の前日だけを「節分」と呼んで特別に祝うようになったといわれています。古来より季節の変わり目は、邪気が生まれやすいと考えられており、節分は病や災いをはらい、無病息災（病気をしないで健康であること）を願う行事として親しまれてきました。

節分の豆をまいて鬼を追い払う行事は、古代中国で行われていた厄払いの儀礼「追儺（ついな）」という行事からきたとされています。追儺は年の終わりの大晦日に行われる儀式で、疫病や災いをもたらす鬼神を町や宮廷の外へ追い出す悪霊払いの行事でした。「方相氏（ほうそうし）」と呼ばれる役が仮面を付け、掛け声や武具を用いて邪気を退散させたとされています。この儀式が日本に伝わり、奈良時代から平安時代に宮中で実施されたものが現在の節分の元になったといわれています。平安時代の節分は、陰陽道の思想を背景に、疫病や災いをもたらす存在を「鬼」に見立てて、町や宮中から追い出すことし、国家の無病息災を祈って行われていたそうです。当時は豆まきではなく、中国で魔除けの象徴とされていた桃の木の弓や葦（あし）の矢を用いて邪気を払っていたといわれています。

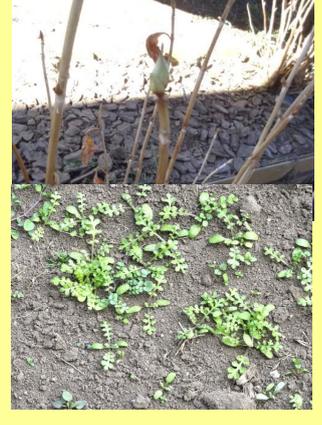
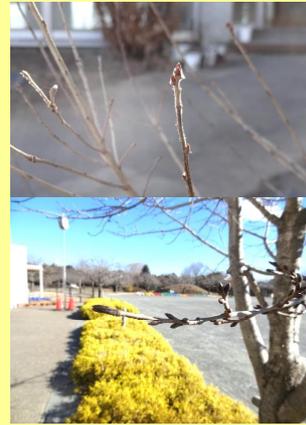
室町時代から江戸時代には、町人文化の発展とともに豆まきが一般化し、掛け声・福豆・年男年女などが整ったといわれています。「魔（ま）を滅（め）する」ことから豆が使われるようになったそうです。「鬼は外、福は内」という掛け声には、悪いものを家の外へ追い出し幸運や健康といった福を家の中へ招き入れるという意味があります。

地域の神社仏閣の節分会、節分祭などと家庭内での慣例的な行事として並行して広まることで、節分は大衆的な年中行事となり、今も続いています。

冬の植物

～ 寒さの中春の準備をしています。～

4年生の理科では冬の植物を観察して、他の季節と比較して、植物は1年の間にどういった成長をするかを観察する学習があります。先日は4年生がスクールプラザの花壇にあるアジサイの様子を観察していました。昨年梅雨の時期に咲いた花を付けて枝は枯れたようになっていました。しかし、別の部分からは新しい枝が伸びてきており、その先端にはほんの僅かではありますが、葉っぱが顔をだしていました。とても寒い時期ではありますが、植物は確実に春の準備をしています。同じスクールプラザの冬は日陰の時間が多い場所にあるコナラの枝の先には、ほんの少しだけ赤茶色をした芽のような部分が見られました。春の訪れとともに枝葉を伸ばす準備をしている様子を観察することができました。



仲間と遊びながら体力向上

～ ロング昼休みは仲間と一緒に。～

火曜日のロング昼休みは、各学級とも運動場や体育館で学級の仲間と一緒に遊んで、仲間との絆を深めると共に、体力向上に努めています。運動場では鬼ごっこやドッジボール、ケイドロなどを楽しんでいます。遊びの最中は、夢中にならぬため、鬼から全力で逃げたり、当てるために思い切りボールを投げたりします。夢中になって遊ぶことで、走力や投力が高まります。この日は、体育館では5年生がネオホッケーを楽しんでいました。

